



戦後 80 年 平和への想い

今年、戦後 80 年という節目を迎え、8 月にはテレビ番組などでも様々な特集が組まれていましたので、いろいろな形でそれに触れた方は多いと思います。日本はこの 80 年間で、平和と繁栄の道を歩んできましたが、その道のりは決して平坦なものではありませんでした。



80 年前、私たちの国は想像を絶する困難に直面していました。多くの命が失われ、国土は荒廃し、希望が見えない日々が続きました。当時の人々は、それでも前を向き、必死に生き抜きました。彼らの不屈の精神と、平和への強い願いがあったからこそ、私たちは今の豊かな社会を手にすることができました。

私たちは、過去の戦争から多くの教訓を学び、これからも平和な社会を継続して築き上げていかなければなりません。

伊丹万作『戦争責任者の問題』(1946 年)から

伊丹万作さん（映画監督 伊丹十三さんの父）のこのエッセイは、戦争の責任を誰に負わせるかについて、特に「だまされた」として自らの責任を免れようとする当時の多くの日本人の安易な態度を批判し、国民全体の自己反省の必要性を説いたものです。

その『戦争責任者の問題』の中で彼は、戦時中、多くの国民が国の宣伝にだまされ、戦争に協力してしまった事実をみつめ、こう記しています。

『だまされた』といって平気でいられる国民なら、おそらく今後も何度でもだまされるだろう。いや、現在でもすでに別のうそによってだまされ始めているにちがいないのである。

伊丹さんは、「だまされていたから責任はない」とする国民全体の無気力、無自覚、無反省、無責任な姿勢こそが、次の過ちを招くと警笛を鳴らしています。

また、当時の日本に必要なこととして、次のように結んでいます。

まず「国民全体がだまされたということの意味を本当に理解し、だまされるような脆弱な(ぜいじゃく; もろくて弱い)自分というものを解剖し、分析し、徹底的に自己を改造する努力を始めること」である。

ハンナ・アーレント『エルサレムのアインヒマン』(1963 年)から

政治哲学者のハンナ・アーレントさんは、ナチス・ドイツによるユダヤ人の大量虐殺を組織的に実行した責任者の一人、アドルフ・アインヒマンの裁判を傍聴し、そのことをまとめました。

アーレントさんが驚いたのは、そのアインヒマンが悪魔的な怪物ではなく、単に自分の業務を果たし、命令に従った、ごく普通の人間、平凡な公務員だったことでした。

そして、アーレントさんは次のように述べています。

アインヒマンがまったく思考していないこと、それが、彼がある時代の最大の犯罪者の一人になる要因だった。

このように、私たちが考えることをやめてしまったとき、知らないうちに戦争に「加担する側」になってしまうかもしれないということなのです。

平和を創る力

戦争は、他者を排除し、支配しようとする心の現れです。平和は、多様性を尊重し、互いを認め合う心から生まれます。それは、特別な誰かによって創られるものではありません。私たち一人ひとりの日々の行動や言葉が、平和を創り出す力となります。単に知識だけではなく、相手の立場になって状況を自分でしっかり考えることが大切です。



自分の考えを言葉で丁寧に伝え、行動することこそが、小さな平和を築く第一歩です。そうすることで、より大きな平和へと繋がっていくはずです。これからも、生徒たちが平和の担い手として、社会に貢献できる人へと成長できるよう願っています。